

日本語を楽しく

【第12回】歳時記をかたわらに

作家 阿刀田 高



フランス人を相手に、

「日本には歳時記^{さいじき}ってものがあるんだ」

と言ったところ、

「なに、それ？」

「よく見るのは俳句歳時記。季節ごとに、いろいろ言葉を並べておいて俳句を創るときに使うんだ」

「あ、俳句ね」



彼は俳句に関心を持っていたので、すぐに歳時記にも興味を抱き、自分用の簡略版歳時記を創った。

「これで俳句が創りやすくなる」

「そう。俳句には季語がなくちゃあ。俳句歳時記に載っているのは、みんな季語だから」

「ボン」

因みに言えば、外国人が創る俳句は（英語とかフランス語とかで創った場合を言うのだが）五七

五を踏むわけにもいかず、季語さえ含まれない場合もあり、ただの短い詩というケースも多いのだが、私としては、

「せめて季語だけは入れてよ」と注文をつけている。

もしかしたら英語版、フランス語版などなどのりっぱな歳時記がすでに編まれて出版されているのかもしれない。

それはともかく俳句はすばらしい日本文化である。五七五の短い文言で、人間の心と大自然を通わせている。風俗習慣のおもしろさを訴えている。しかも紙一枚、鉛筆一本があれば楽しめる。いつでも、どこでも、簡単に創ることができて、日本語のすばらしさを堪能することができる。若い人に……いや、子どもたちにもおおいに勧めたい。

そこで、ふと思いついた。

「子ども向けの俳句歳時記、あってもいいんじゃないのかな」

幼な心を揺さぶるイラストレーションなんかもそえて……。イラストレーションは私の手におえないが、やさしい名句を選び、用字用語に手を加え（現代表記など）ルビを多くつけて、ついでに説明をそえ、たとえば、

※春の海

春の海終日のたりたり哉

蕪村

“ひねもす”は一日中のこと、“のたりのたり”はゆったりとねっていること。蕪村（与謝蕪村・一七一六～八三）は江戸期を代表する俳人。

※雪解け

町住みや雪とかすにも銭がいる 一茶
一茶（小林一茶・一七六三～一八二七）も江戸期を代表する俳人だが、町に住んでいると、昔も雪を解かすのにお金がかかったんですね。

※雛祭

二人して雛にかしづく楽しさよ 漱石
季語としては雛祭をかかっているが、雛、つまりお雛さま人形もこの季語に含まれる。“雛”はここでは“ひいな”と詠むべきだろう。“かしづく”は敬い愛すること。母娘だろうか、姉妹だろうか、二人で楽しむのどかな風景。漱石はもろん夏目漱石（一八六七～一九一六）、知ってますね。

※燕

燕のゆるく飛び居る何の意ぞ 虚子
“燕”はここでは“つばくろ”と詠むべきだろう。ツバメはたいいてい速く飛ぶが、ゆるく飛んでいるのは、なんのつもりかな、という疑問。虚子は高浜虚子（一八七四～一九五九）。明治・大正・昭和にまたがる第一人者だ。

と、まあ、若い人向けでも編んでみると結構むつかしい。

大人たちも日本人なら座右に歳時記を置いて、移り行く季節、人それぞれの心と思案に思いを馳せるのも趣きが深く、わるいものではない。

